ポー・カレン語の名詞句 *

加藤　昌彦

1. 言語の概要と目的

ポー・カレン語はチベット・ビルマ語派カレン語群に属する言語である。Kato（2009）で私見を示したように，ポー・カレン語には表 1 に示すような方言群がある。本稿で扱う方言は，Eastern Pwo Karen に属するパアン方言である。

方言群	分布地域
Western Pwo Karen	Irrawaddy Delta, Myanmar
Htoklibang Pwo Karen	Bilin Township, Mon State, Myanmar
Eastern Pwo Karen	Karen State, Myanmar; Mon State, Myanmar; Tennasserim Division, Myanmar; West-Central Thailand
Northern Pwo Karen	Northwestern Thailand

表 1　ポー・カレン語諸方言

パアン方言は，ミャンマーのカレン州（Karen State）の州都パアン（Hpa-an）の周辺で話される。パアンの位置は図 1 に示したとおりである。パアンの北東約 30 km に位置するフラインボエ（Hlaingbwe）や，パアンの東南東約 70 km に位置するコーカレイ（Kawkareik）の方言も，言語上の差異は微少であるため，パアン方言に含めて考えることができる。

カレン語群に属する言語はすべて SVO 型の語順を持つことで知られている。これは，SOV 型の言語が一般的なチベット・ビルマ諸語の中で特異である [1]。この語順の特異性に対する説明としては，カレン祖語の段階でモン語（Mon）との接触によって語順が OV から VO に変化したと考えるのが最も自然である（Matisoff 1991a: 481–482, 同 2000: 346–347 を参照のこと）。

* 本稿は，2013 年 11 月 30 日に京都大学人文科学研究所で開催された「TB+ 研究会」（池田巧教授主宰）での発表原稿に加筆したものである。当日いただいた質問やコメントに基づいてミャンマーでの追加調査を行い，修正した。貴重なご意見をいただいた参加者の方々に深くお礼を申し上げる。

[1] SVO 型の語順を示すチベット・ビルマ系言語には他にも Bai や Mru，死語である Pyu などがあるが，語群単位で数十の言語が SVO 型語順を持つのはカレン語群のみである。なお，Bai は Sinitic に属する可能性がある。

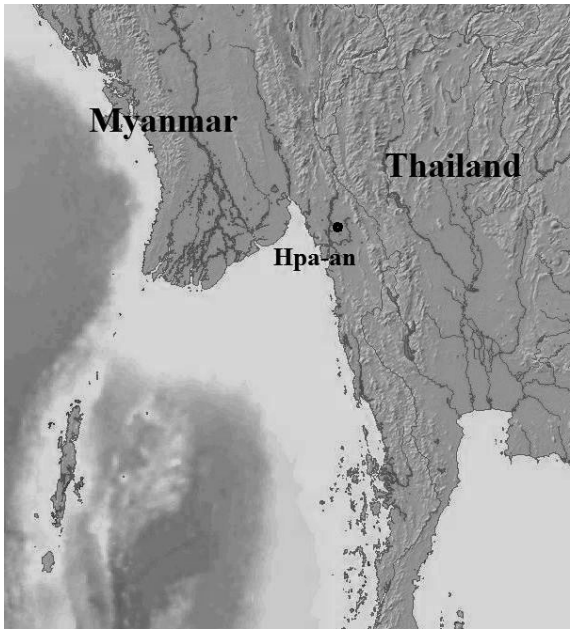

図 1　パアンの位置

ポー・カレン語の単語は，名詞，動詞，副詞，助詞，感嘆詞の 5 つに分類することができる。語類認定のためのテストについては，加藤（2008）に示してあるので，そちらを参照していただきたい。名詞の認定についてのみ述べておくと，ポー・カレン語の名詞は一般的に，単独で発話を構成することができ，また，動詞の項になることができるが，動詞助詞と共起しない，という特徴を持つ。

ポー・カレン語は分析的（analytic）な特徴を持つ言語であり，屈折は存在しないと言ってもよく，接辞による派生も数が限られている[2]。一個の節は図 2 に示すような要素で構成される。括弧でくくった要素は任意の要素である。動詞のみ括弧でくくっていない。これは，加藤（2013）で述べたとおり，動詞がポー・カレン語の節における必須要素だからである。

(名詞 $_1$) (Vptc(s)) 動詞 (Vptc(s)) (名詞 $_2$) (名詞 $_3$) (副詞的要素)

図 2　ポー・カレン語の節の基本構造

「名詞 $_1$」は主語であり，「名詞 $_2$」と「名詞 $_3$」は目的語である。二つの目的語が現れるのは /phílâɴ/「与える」などの ditransitive verb のときのみである。

[2] 加藤（2004）は，10 個の派生接辞を挙げている。

/phílâN/ のように授受にかかわる ditransitive verb の場合，「名詞$_2$」が受領者（recipient），「名詞$_3$」が対象（theme）を表す。「副詞的要素」には，副詞，側置助詞句，副助詞[3]を含む。「Vptc」は動詞助詞（verb particle）で，動詞の前に現れるものと後に現れるものとがあり，それぞれ複数個現れることができるので，「Vptc(s)」と表示してある。図 2 に示した要素間の順序は固定している。下の (1) に例を示す。

(1)

θàʔwà	mə	ʔáN	bá	mì	ʔáʔá	lɔ́	ɣéiN	phɔ̀N	ɕī
(人名)	IRR	食べる	(機会)	ご飯	沢山	LOC	家	中	も
名詞$_1$	Vptc	動詞	Vptc	名詞$_2$	副詞	側置助詞句			副助詞
副詞的語句									

ターワーは家でたくさんご飯を食べられることにもなろう

本稿の目的は，ポー・カレン語の名詞句の構造を，スロットに分解して記述することである。同様の解釈は既に加藤（2004）の第 8 章において行ったが，それはまだ試験的な，一般性に欠けるものであった。本稿の試みにより，ポー・カレン語の名詞句の構造は，より明瞭に見えてくるであろう。

2. 名詞句を構成する要素と順序

本稿では，ポー・カレン語の名詞句を構成する要素と出現位置（スロット）は図 3 に図示するように一般化できると考える。主要部名詞（head noun）は必須要素であり，括弧でくくったのはそれを修飾する任意の要素である。

(RC)	(NM)	(PRON)	HEAD NOUN	(RC)	(ADP)	(NUM + CLF)	(PL)	(DEM)
SLOT1	SLOT2	SLOT3	SLOT4	SLOT5	SLOT6	SLOT7	SLOT8	SLOT9

図 3　ポー・カレン語の名詞句の構成要素

SLOT1 には関係節（relative clause）が現れる。SLOT2 には主要部名詞を修飾する名詞（修飾名詞 noun modifier）が現れる。SLOT3 には代名詞（pronoun）が現れる。SLOT4 は主要部名詞の位置である。SLOT5 には SLOT1 と同じく，関係節が現れる。SLOT6 には側置助詞句（adpositional phrase）が現れる。SLOT7 に

[3] 助詞には，側置助詞（adpositional particle），従属節助詞（subordinate clause particle），一般助詞（general particle），名詞修飾助詞（noun modifying particle），動詞助詞（verb particle），副助詞（adverbial particle），文助詞（sentence particle）の 7 つがある。

は「数詞＋助数詞」が現れる。SLOT8 には複数性（plurality）を表す助詞[4]が現れる。右端の SLOT9 には指示機能（demonstrative function）を持つ助詞が現れる。

下の (2) から (5) に 2 個以上の要素からなる名詞句の例を示す。'|' はスロット境界，'[ ]' は関係節である。筆者のデータにすべてのスロットが埋まった名詞句は見当たらない。そのような名詞句を作成することは理論的には可能だと思われるが，おそらく非常に困難である。

(2) phlòʊN | chəxîchəlà
カレン 文化
{SLOT2}{ SLOT4 }
カレン人の文化

(3) já | [phàdú] | θɜ̄N béiN | jò
魚 大きい 三 枚 this
{SLOT4}{ SLOT5 }{ SLOT7 }{ SLOT9 }
この三匹の大きな魚

(4) jə | θò | dē khúláʊ | θè | nɔ́
1SG 友人 with 帽子 （複数） that
{SLOT3}{ SLOT4 }{ SLOT6 }{ SLOT8 }{SLOT9}
あの，帽子をかぶった私の友人たち

(5) [ʔəwê xwè]| já | [phàdú] | lə̀ cəpwē phâNkhú ʔò| lə béiN | nɔ́
3SG 買う 魚 大きい LOC 机 上 向こうの 一 枚 that
{ SLOT1 }{SLOT4}{SLOT5}{ SLOT6 }{ SLOT7 }{SLOT9}
あの一匹の，向こうの机の上にある，彼が買った大きい魚

なお，(5) の SLOT6 で場所を表す側置助詞 lə̀ によって導かれた名詞句は，これ自体が，次に示すように複数のスロットからなる名詞句である。

(6) cəpwē | phâNkhú | ʔò
机 上 向こうの
{SLOT2}{ SLOT4 }{ SLOT9 }
向こうにある机の上

[4] SLOT8 の「複数性を表す助詞」および SLOT9 の「指示機能を持つ助詞」は，加藤（2004）では「名詞修飾助詞」に分類したものである。定義上，名詞修飾助詞は名詞句に前置または後置される助詞である。よって，名詞句の外側に現れる要素である。しかしその後，筆者は，複数性を表す助詞と指示機能を持つ助詞は名詞句の内側に現れると考えるようになった。したがって，これらを名詞修飾助詞から除外するか，名詞修飾助詞の定義を変更する必要がある。

次の 3．では，主要部名詞を修飾する様々な要素を観察する。

3．名詞を修飾する要素

先に図 3 に基づいて述べたとおり，名詞を修飾する要素には，関係節，修飾名詞，代名詞，側置助詞句，数詞＋助数詞，複数性を表す助詞，指示機能を持つ助詞，がある。以下の 3.1. から 3.7. では，この順序で，これらの要素がどのように主要部名詞を修飾するかを見る。さらに，3.8. では状態動詞由来の形式が名詞を修飾するように見える現象について解釈を示し，3.9. では名詞句内の再帰性について論じる。

3.1. 関係節

ポー・カレン語の関係節の種類や振舞いについて，筆者は加藤（2001）において詳細に論じた。ここではそこで示した考察に基づいて簡略に述べる。ポー・カレン語の関係節には，関係節標識が介在しない「前置型」と「後置型」，および，関係節標識が介在する「標識介在型」がある。これらの関係節はすべて主要部外在型の関係節である。ポー･カレン語には，主要部内在型の関係節は存在しない。

日常会話では前置型と後置型が主に使われる。そこでまず，前置型と後置型について述べる。前置型の関係節は，(7) のように主要部名詞の前に置かれる。この位置は SLOT1 である。他方，後置型の関係節は，(8) のように主要部名詞の後に置かれる。この位置は SLOT5 である。どちらの関係節においても，関係節化された名詞は空所（gap）になる。

(7) [jə dú] phlòʊN nɔ́ mwɛ̄ ʔəwê
1SG 殴る 人 TOP COP 3SG
私が殴った人は彼だ

(8) phlòʊN [dú jə] nɔ́ ɣɛ̂ ʔé
人 殴る 1SG TOP 来る NEG
私を殴った人は来なかった

前置型と後置型の違いは，後置型は主要部名詞が関係節の主語に相当する場合に用いられ，前置型はそれ以外の場合に用いられる，ということである。

ポー･カレン語に動詞と形容詞の区別はなく，状態を表す単語も動詞である（加藤 2008 参照）。したがって，(3) や (5) の例における状態動詞 phàdú「大きい」は，主要部名詞を修飾する後置型関係節である。

一方，(9) と (10) に示す関係節が標識介在型である。これらはそれぞれ (7) お

よび (8) と同一の意味を表している。標識介在型の特徴は, 関係節を導く助詞（関係節標識）lə́ が用いられるということである。そして，lə́ とそれによって導かれた節が全体として SLOT5 に現れる。標識介在型は，民話の語りや演説など，比較的かしこまった場面で使われる。通常の日常会話ではめったに使われることがない。それが前置型や後置型との違いである。

(9) phlòʊN lə́ [jə dú (ʔə̀)] nɔ́ mwɛ̄ ʔəwê
人 REL 1SG 殴る 3SG TOP COP 3SG
私が殴った人は彼だ

(10) phlòʊN lə́ [ʔə dú jə̀] nɔ́ ɣɛ̂ ʔé
人 REL 3SG 殴る 1SG TOP 来る NEG
私が殴った人は来なかった

標識介在型では，空所を用いる前置型および後置型と違って，resumptive pronoun（Comrie 1989: 147）が生じる。すなわち，主要部名詞を指示する代名詞が関係節内に現れる。この代名詞は，関係節内における統語役割が主語の場合（(10) 参照）は, 主要部が生物であれ非生物であれ, 必須である。非主語の場合（(9) 参照）は主要部が生物の場合にのみ現れることがある。(9) の関係節内の三人称代名詞を括弧でくくってあるのは，これが必須ではないことを表している。

先ほど，後置型は主要部名詞が関係節の主語に相当する場合に用いられ，前置型はそれ以外の場合に用いられると言った。しかし，この原則に反する場合がある。主要部名詞が主語であっても，その主要部名詞の定性（definiteness）が高い場合，前置型が用いられることがある。次に挙げる例がそうである。

(11) [ʔɔ́thɔ̄ thàiN] jə lə ɣà
残る 再び 1SG 一 CLF（人間）
再び取り残された私

(12) [xîlà chêiNpràN tɛ̀] ʔə mé nɔ́
美しい 清らかな 非常に 3SG 顔 that
その非常に美しく清らかな彼女の顔

典型的には，主要部名詞が代名詞や固有名詞であったり，代名詞で修飾された名詞である場合，これらの例のように，主要部名詞が主語であっても前置型が使われることがよくある。また，代名詞，固有名詞，「代名詞で修飾された名詞」でなくても，談話において既出の名詞であれば，主語の役割を持つ主要部名詞が前置型関係節で修飾される場合がある。

ここまで見た例は，主語あるいは目的語が関係節化されたものだった。しかし，ポー・カレン語では，次のように，主語や目的語以外の周辺的な名詞句も関係節化が可能である。この例では，道具を表す名詞句が関係節化されている。

(13) [jə dú ʔà] lé nɔ́ mwɛ̄ phjā jò
1SG 殴る 3SG 棒 TOP COP 物 this
私が彼を殴った棒はこれだ

さらに，次の例の ʔənə̂N「におい」のように，節内要素ではない名詞句を関係節で修飾することも可能である。これは日本語学で寺村秀夫が「外の関係」と呼ぶ連体修飾節に相当するものである（寺村 1993 など参照）。

(14) [ʔáNká já] ʔənə̂N
焼く 魚 におい
魚を焼くにおい

3.2. 修飾名詞

主要部名詞を修飾する名詞は，(2) の例における phlòʊN「カレン」のように，SLOT2 に現れる。このスロットに現れた名詞を修飾名詞と呼んでおく。下に他の例を挙げる。いずれの例においても，左側の名詞が修飾名詞で，右側の名詞が主要部名詞である。

(15) təkɔ̀ phɔ̂
ハス 花
ハスの花

(16) néiNθâN kəwɔ̀
新年 朝
新年になった朝

(17) phjāθâ chəmà
宗教 仕事
宗教にまつわる行為

所有者と所有物の関係も同じように表される。すなわち，(18) のように，所有者名詞が SLOT2 に現れて，SLOT4 に現れた所有物名詞を修飾する。

(18) ʔəmū phjâ
母 店
母の店

3.3. 代名詞

代名詞には，第一形，第二形，強勢形の 3 つの形がある。表 2 に示すとおりである。第一形は主に，動詞や名詞の前に置かれる。動詞の前に置かれた場合には主語を表す。名詞の前に置かれた場合には下で述べるように所有者を表す。第二形は主に，動詞や側置助詞の目的語位置で使われる形である。強勢形は，代名詞を強調するときに使われる形で，あらゆる環境に現れることができる。パアン方言では，三人称単数代名詞が主語位置に現れた場合，ʔə ではなく強勢形の ʔəwê が使われることが多い。一人称複数代名詞には /h/ で始まるものと /p/ で始まるものがあるが, これは自由変異である。三人称複数の第一形には 2 つの形があり，ʔəθí は動詞の前でも名詞の前でも使われるが，ʔəθíʔə は名詞の前でしか使われない。

	第一形	第二形	強勢形
1SG	jə	jə̀	jəwê
2SG	nə	nə̀	nəwê
3SG	ʔə	ʔə̀	ʔəwê
1PL	hə ~ pə	hə̀ ~ pə̀	həwê ~ pəwê
2PL	nəθí	nəθí	nəθíwê
3PL	ʔəθí, ʔəθíʔə	ʔəθí	ʔəθíwê

表 2　代名詞の 3 つの形

これらの形のうち第一形は，SLOT3 に現れて所有者を表す。(4) の一人称単数代名詞 jə がその例である。下に二人称単数と三人称単数の例を挙げておこう。

(19) nə châiN
2SG シャツ
あなたのシャツ

(20) ʔə ɣéiN
3SG 家
{ 彼 / 彼女 } の家

前節 3.2. で，所有者名詞と所有物名詞の表し方について述べた。(18) に示したように,「所有者名詞＋所有物名詞」という形を取る。このような名詞句において，

三人称代名詞の第一形が所有物名詞の前に置かれ，(21) のような形を取ることがある。所有を表す代名詞のスロットを，修飾名詞と同じ SLOT2 ではなく SLOT3 と考えるのはこのためである。(21) のような言い方がある以上，修飾名詞の後にもう一つスロットを設定しておかなければならない。

(21) ʔəmū　ʔə　phjâ
　　母　3SG　店
　　母の店

なお，(18) と (21) にどのような意味的あるいは用法上の差異があるのかは現段階では分かっていない。

3.4. 側置助詞句

側置助詞は，一般的に言うところの adposition である。側置助詞には，(22) の lə́ や (23) の dē のように，名詞句を副詞的語句として節中に導入する機能がある。側置助詞が名詞句と共に形成する句を側置助詞句と呼ぶ。

(22) jə　ʔɔ́　lə́　thəʔàN
　　1SG　いる　LOC　（地名）
　　私はパアンに住んでいる

(23) jə　ʔáN　θə̂N　dē　nʊ́thòʊN
　　1SG　いる　おかず　with　さじ
　　私はおかずをさじで食べた

側置助詞について筆者は加藤（2004）および加藤（2010）において詳細な記述を行った。これら拙論において述べたとおり，ポー・カレン語には次の 9 個の側置助詞がある。

lə́	「～において［位置］」「～から［起点］」「～へ［着点］」
thōN	「～のあたりに」
dē	「～で［道具］」「～と［随伴者］」「～を持って［付帯物］」など
bê ... θò	「～のように」
nî	「～くらい（の大きさ）で」
xwē	「～くらい（の量）で」
báchâiN	「～に関して」
təkhɔ̂lə́	「～以来」
phɔ̄	「～のうちに」

これら 9 個のうち，上から 7 番目までの lɔ́, thōɴ, dē, bê ... θò, nî, xwē, báchâiɴ によって作られた側置助詞句には名詞を修飾する機能もあり，それは SLOT6 に現れる。例 (4) と (5) の SLOT6 を参照されたい。下に，名詞修飾機能を持つ 7 個の側置助詞の各々につき，例を一つずつ挙げる。

(24) phlòʊɴ lɔ́ pəjàɴkhāɴ
人 LOC ミャンマー
ミャンマーの人

(25) phlòʊɴ thōɴ jò
人 ～あたり ここ
この近辺の人

(26) phlòʊɴ dē láiʔàʊ
人 with 本
本を持った人

(27) chəθúchəθá bê khòθá θò
果物 bê マンゴー θò
マンゴーに似た果物

(28) lé nî cúkhú
棒 ～くらい 腕
腕くらいの大きさの棒

(29) páichâɴ xwē jò
金 ～くらい これ
これくらいの額のお金

(30) láiʔàʊ báchâiɴ pəjàɴkhāɴ
本 ～について ミャンマー
ミャンマーに関する本

位置・起点・着点を表す lɔ́ について注意すべきことは，名詞修飾に使われたとき，この側置助詞は位置しか表すことができないということである。したがって，(24) は「ミャンマーに住む人」あるいは「ミャンマーにいる人」という意味であり，「ミャンマーから来た人」あるいは「ミャンマーへ行く人」という意味には取れない。これと同様に, dē には「～で［道具］」「～と［随伴者］」「～を持っ

て［付帯物］」を始めとする様々な意味があるが，名詞修飾に使われたときに表すことのできる意味は付帯物のみである。

なお，名詞修飾に使われた lə́ は省略されることがある。すなわち，(24) は次のようにも言う。

(31) phlòʊN pəjàNkhāN
人 ミャンマー
ミャンマーの人

3.5. 数詞＋助数詞

SLOT7 には数詞と助数詞を用いた数量表現が現れる。数詞も助数詞も名詞の下位範疇である。

1 から 9 までの数詞は次のとおり。lə̂N「1」，nî「2」，θə̂N「3」，lī「4」，jɛ̄「5」，xû「6」，nwê「7」，xó「8」，khwī「9」。ポー・カレン語は 10 倍ごとに位を取る方式を用いており，10 の位は chî，100 の位は jà，1000 の位は thôN，10000 の位は là で，それぞれ表される。これら位取りを表す形態素に 1 から 9 の数詞が前置されて，10, 100, 1000, 10000 の倍数が表されるが，その際，lə̂N「1」は lə に，nî「2」は nī に，θə̂N「3」は θə̄N に，xû「6」は xū に，nwê「7」は nwē に，それぞれ交替する。10 の位を例に取ると，ləchî「10」，nīchî「20」，θə̄Nchî「30」，līchî「40」，jɛ̄chî「50」，xūchî「60」，nwēchî「70」，xóchî「80」，khwīchî「90」となる。あとは位取りの大きい順に並べるだけで数を数えることができる。例えば，2158 は，2000，100，50，8 の順で並べる。2000 は nīthôN，100 は ləjà，50 は jɛ̄chî，8 は xó であるから，これを順に並べた nīthôNləjàjɛ̄chîxó が 2158 である。

量化表現として名詞を修飾するときには，数詞のみの使用は不可能であり，数詞の後に助数詞（numeral classifier）を置いて「数詞＋助数詞」とする。これが SLOT7 に現れる。数詞が助数詞と共起するとき，1 の位の 1 から 9 は，位取りを表す形態素に前置されるのと同じ形が現れる。人間を数える助数詞 ɣà を例に取ると，次のとおりである。lə ɣà「1 人」，nī ɣà「2 人」，θə̄N ɣà「3 人」，lī ɣà「4 人」，jɛ̄ ɣà「5 人」，xū ɣà「6 人」，nwē ɣà「7 人」，xó ɣà「8 人」，khwī ɣà「9 人」。これは 10 の位以上の形態素が現れても同じである。例えば，31 人は θə̄Nchîlə ɣà となり，476 人は lījànwēchîxū ɣà となる。ただし，1 の位がゼロの場合，「数詞＋助数詞」という原則的順序を取ることができず，助数詞の前に接頭辞 ʔə- を付した上で，数詞と助数詞の順序を逆にした「ʔə- 助数詞＋数詞」という形が用いられる。例えば，10 人は ʔəɣà ləchî，90 人は ʔəɣà khwīchî，700 人は ʔəɣà nwējà となる。1 の位がゼロの場合に数詞と助数詞の順が原則と逆になるのは隣接する TB 系言語のビルマ語と同じであるが，ビルマ語では 10 の場合に原則順と逆順の両方が使えるのに対し，ポー・カレン語では例えば 10 人を *chî ɣà と言うことはできない。

代表的な助数詞には次のようなものがある。

dùɯ は人間以外の哺乳類に用いる。「～匹」。また，general classifier としても用いられる。
ɣà は人間に用いる。「～人」。
béiɴ は平らな物に用いる。「～枚」。鳥類，魚類，昆虫にも用いる。
bòɴ は細長い物に用いる。「～本」。蛇やトカゲを数えるときにも用いる。
phlóʊɴ は丸い（円い）物に用いる。「～個」。

本節の最初に述べたとおり，「数詞＋助数詞」（1 の位がゼロのとき助数詞＋数詞）は SLOT7 に現れる。(3) の例を参照していただきたい。下に他の例を挙げる。

(32) pənā jɛ̄ dùɯ jò
水牛 5 匹 this
この 5 頭の水牛

(33) pəjàɴ ʔəɣà θəɴjà nɔ́
ビルマ人 ～人 300 that
あの 300 人のビルマ人

東南アジアの様々な言語では，類別詞が数詞を伴わずに現れることがある。しかし, ポー・カレン語の助数詞は数詞を伴わずに現れることはできない。したがって，*pənā dùɯ jò（水牛 / 匹 / この）や *dùɯ jò（匹 / この）のような言い方はできない。

最後に重要なこととして，「数詞＋助数詞」が主要部名詞としても機能することを指摘しておかなければならない。次の文における lə dùɯ はそのような例である。なお，ここで「数詞＋助数詞」は照応的に使われている。

(34) ʔəwêjò mwɛ̄ jə thwí. lə dùɯ jò ʔɛ́ jə̀ châ mā
これ COP 1SG 犬 一 匹 この 愛する 1SG much very
これは私の犬だ。この一匹（= この犬）は私を非常に愛している

3.6. 複数性を表す助詞

複数性を表す助詞には θɛ̀, ləphá, θɛ̀ləphá などがある。これらは SLOT8 に現れる。θɛ̀ を用いた (4) の例を参照されたい。これら形式の違いについては不明な点が多いが，日常会話ではもっぱら θɛ̀ が使われることは明らかである。他は格式張った文体でよく用いられ，日常会話ではほとんど聞くことがない。したがってここでは θɛ̀ のみについて述べる。

θɛ̀ には二つの用法がある。一つは，(35) に示したような，主要部名詞の表す事物そのものの複数性を表す用法で，もう一つは，(36) に示したような，主要部名詞が表す事物以外の存在を含意する用法である。後者の用法における意味解釈は，主要部名詞が固有名詞である場合にのみ可能である。

(35) ɣéiɴ θɛ̀
家 （複数）
家々

(36) cɔ̀ʔɛ́phlòʊɴ θɛ̀
（人名） （複数）
チョーエープロンたち

「数詞＋助数詞」が現れるスロットを SLOT7 とし，複数性を表す助詞が現れるスロットを SLOT8 としたのは，これらが常にこの順序で並ぶからである。(37) における複数助詞を「数詞＋助数詞」の前に移動して (38) のようにすることはできない。

(37) láiʔàʊ θɔ̄ɴ béiɴ θɛ̀ nɔ́
本 3 枚 （複数） that
あの 3 冊の本

(38) *láiʔàʊ θɛ̀ θɔ̄ɴ béiɴ nɔ́
本 （複数） 3 枚 that

参考までに述べておくと，隣接する TB 系言語であるビルマ語では，(37) のように数詞を伴う量化表現と複数を表す形式が共起することはない。

3.7. 指示機能を持つ助詞

名詞句構造の右端に位置する SLOT9 には，指示機能を持つ助詞が現れる。一般的に言うところの指示詞である。本稿でもこれ以降は指示詞と呼ぶことにする。

日常会話でよく使われる指示詞には次の 3 つがある。

jò 自分の領域にあるものを指す。
nɔ́ 自分の領域にないものを指す。
ʔò 自分の領域にないもので，非常に遠くにあるものを指す。

日本語では，jò は「この」，nɔ́ は「その」または「あの」，ʔò は「あの」ある

いは「向こうの」などと訳せる場合が多い。jò の例としては (3)，nɔ́ の例としては (4) と (5)，ʔò の例としては (6) を見られたい。指示詞はこれまで挙げてきた他の例にも何度も現れているので，ここであらためて例を示す必要もないだろう。

加藤（2010）に示したように，ポー・カレン語において指示詞は文の意味解釈に大きな貢献をすることがある。側置助詞 lɔ́ を用いた文 (39) と (40) を比較してみよう。

(39) ʔəwê　mə　ɣê　lɔ́　θítàʊ　jò
3SG　IRR　来る　LOC　病院　この
彼は病院へ来るだろう

(40) ʔəwê　mə　ɣê　lɔ́　θítàʊ　ʔò
3SG　IRR　来る　LOC　病院　あの
彼は病院から来るだろう

ポー・カレン語の側置助詞 lɔ́ は，3.4. で示したように，「位置」「起点」「着点」の 3 つの意味を表しうる。したがって，様々な語用論的情報を参照しなければ，lɔ́ がどの意味を表しているのかが分からないことがある。ɣê「来る」は，移動を表す動詞なので, lɔ́ を伴う名詞句は起点である可能性と着点である可能性がある。(39) では，jò が使われているので，「病院」は発話者の近くにあるはずである。かつ，ɣê は発話地点への移動を表す動詞である。したがってこの場合，「病院」は着点でしかあり得ない。逆に，(40) では ʔò が使われているので，「病院」は発話者から離れた場所にあるはずである。そのため，「病院」は起点であるとしか解釈できない。指示詞の重要な働きの一つは, 限定であると思われる。しかしポー・カレン語においては，限定という観点から見たときに名詞に後置された指示詞が不要であるように見えることがある。その理由の一つはおそらく，場所の意味解釈を一つに絞ることである。

3.8. 名詞を修飾する状態動詞由来の形式の問題

ここでは，状態動詞由来の単語のスロットをいずれと解釈するかの問題について論じたい。3.1. で述べたように，名詞を修飾する状態動詞は関係節の一種と考えられる。例えば，(41) における dʊ́「大きい」は後置型の関係節であり，SLOT5 に現れていると考えられる。

(41) phjâ　dʊ́
店　大きい
大きな店

これとほとんど同じ意味を表す言い方として，(42) がある。ʔədú は，動詞 dú に名詞化接頭辞 ʔə- が付加されたものであり，「大きなもの」という意味を表す。この語がどのスロットに現れた要素なのかを考える必要がある。

(42) phjâ ʔədú
店 大きなもの
大きな店

ʔədú は dú と違って名詞であり，これ単独でも名詞句を形成することができる。おそらく，そのことから考えて，この ʔədú は (41) の dú と同様の SLOT5 に現れた要素ではなく，SLOT4 に現れた要素である。すなわち主要部名詞である。そして，その前の phjâ は，SLOT2 に現れた修飾名詞であろう。(42) を日本語で「大きな店」と訳したが，構造的には「店の大きいの」に似ているかもしれない。

実はもう一つ，(41) と同じ意味を次のような言い方で表す場合があるという問題がある。

(43) phjâ dúdú
店 大きく
大きな店

例 (43) の dúdú は繰り返し（reduplication）によって dú から派生した畳語である。ポー・カレン語において，繰り返しは，状態動詞に適用されて副詞を形成する（加藤 2004，第 7 章参照）。副詞は一般的に，(1) における ʔáʔá「たくさん」のように，動詞の後に現れて動詞を修飾するのであり，動詞起源のものであっても動詞そのものではない。だとすれば，(43) の dúdú を関係節と見なすことはできない。また，副詞は単独で名詞句を形成しないので，名詞主要部と見なすこともできない。コンサルタントによれば，このように副詞によって名詞を修飾することは「俗っぽい」と感じるそうである。そのため，この用法はビルマ語から借用した，まだ定着していない形態法である可能性[5]がある。本稿では，さしあたり，SLOT5 には状態動詞由来の畳語が現れて名詞を修飾する場合もあると考えることにする。

3.9. SLOT2 における名詞句の再帰性（recursion）

ポー・カレン語の名詞句における 9 つのスロットのうち，3.2. で述べた SLOT2 には，名詞句がそのまま再帰的に現れることができる。

例えば (44) の名詞句では，phlòʊnthîkhāɴ həθàbáɴ「カレン州の若者」という名詞句がまず形成されたと考えられる。(a) に示したように，この名詞句において，主要部名詞は həθàbáɴ「若者」であり，それを SLOT2 に現れた phlòʊnthîkhāɴ「カ

[5] 口語ビルマ語では，動詞の畳語形が名詞を修飾することができる。

レン州」が修飾している。このようにして作られた名詞句がさらに，(b) に示したような形で，kòʊɴlwɛ̄「組織」を主要部名詞とする名詞句の SLOT2 に埋め込まれているのである。‘|’ は埋め込まれた名詞句内のスロット境界，‘||’ は埋め込み先名詞句内のスロット境界である。

(44) phlòʊɴthîkhāɴ | həθàbáɴ || kòʊɴlwɛ̄
カレン州 若者 組織

(a) { SLOT2 }{ SLOT4 }
(b) { SLOT2 }{ SLOT4 }
カレン州の若者による組織

もう一つ例を挙げておく。(45) では，phlòʊɴ lə ɣà jò「この一人の人間」という名詞句が，より大きな名詞句の SLOT2 に埋め込まれている。それぞれの名詞句のスロットを (a) と (b) に示した。

(45) phlòʊɴ | lə ɣà | jò || ʔə || ɣéiɴ
人 一 ～人 この 3SG 家

(a) {SLOT4}{ SLOT7 }{ SLOT9 }
(b) { SLOT2 }{SLOT3}{ SLOT4 }
この人の家

このように，一度できあがった名詞句を修飾名詞として SLOT2 に再帰的に埋め込んでいくことによって，ポー・カレン語の名詞句を，より大きな構造体へと拡張させることが可能なのである。

4. まとめ

本稿で主張したいことは，ポー・カレン語の名詞句内部にはスロットを設定することができ，そこにどのような種類の形式が現れるかという観点に基づいて名詞句の構造を記述することができるということである。本稿では，9 つのスロットを設定し，SLOT4 が必須要素としての主要部名詞の位置だと述べた。この主要部名詞を中心とし，それを修飾する様々な要素が前後の決められたスロットに現れるのである。さらに，SLOT2 には名詞句を再帰的に埋め込むことができ，それによって名詞句を拡張することができると指摘した。

それぞれのスロットに現れる形式には，上で述べた形式以外のものもあるかもしれない（おそらくあるであろう）。また，スロットの数を今後さらに増やす必要があるかもしれない。しかし，ポー・カレン語の名詞句は，適切な数のスロッ

トを設定し，そこにどのような形式が現れ得るかを適切にリストアップすることによって，正しく記述できることは明らかである。すなわち，ポー・カレン語の名詞句にとって，その内部の要素間順序は非常に重要である。

最後に，要素間順序に関連して，ポー・カレン語の主要部名詞と関係節の順序について述べておきたい。チベット・ビルマ系諸言語の語順の研究である Dryer（2008）は，チベット・ビルマ系諸言語において，名詞と関係節の順序は RelN すなわち「関係節＋名詞」であることが一般的であると述べている。これについては OV 型言語だからという理由付けをすることができないという。なぜなら，チベット・ビルマ系以外の OV 型諸言語においては NRel すなわち「名詞＋関係節」という語順が頻繁に観察されるからである。Dryer は，この議論の中で，VO 型言語における RelN 語順は通言語的に極めて稀であり，その例外として，シナ・チベット系の Bai と Chinese およびアウストロネシア系の Amis を挙げている。そして，カレン系諸言語については，チベット・ビルマ系でありながら，VO 型言語の傾向にたがわず, NRel 語順を示すとしている。しかしながら, 本稿の 3.1. において述べたとおり，ポー・カレン語には RelN 語順が存在するのである。Dryer（2008）はポー・カレン語の資料として Kato（2003）を参照しているが, Kato（2003）で私は本稿と同じく，ポー・カレン語では非主語の場合に RelN 語順が現れることを指摘しているから，なぜポー・カレン語についての言及がなかったのか不思議である。非主語の関係節化にのみ現れる語順なので，特殊なケースと見なしたのかもしれない。実際には，ポー・カレン語には RelN 語順が存在することを強調して，本稿の結びとしたい。

略号

ADP	側置助詞句	PRON	代名詞
CLF	助数詞	RC	関係節
COP	コピュラ動詞	REL	関係節を導く助詞
DEM	指示詞	SG	単数
IRR	非現実法	TOP	主題
LOC	場所を表す助詞	Vptc	動詞助詞
NEG	否定	1	一人称
NM	修飾名詞	2	二人称
NUM	数詞	3	三人称
PL	複数		

転写に用いる記号

子音音素には /p, θ [θ~t̪], t, c [tɕ], k, ʔ, ph, th, ch, kh, b, d, ɕ, x, h, ɣ, ʁ, m, n, (ɲ), (ŋ), ɴ, w, j, l, (r)/ がある。括弧でくくったものは主に借用語に現れる。韻母には /i [ɘ̆i], ɨ, ɯ, ɩ [ɪ], ʊ, e, ə, o, ɛ, a, ɔ, ai, aʊ, əɴ, aɴ [ă̆ɔɴ], oɴ, eiɴ [eiɴ~ei], əɯɴ [əɯɴ~əɯ], oʊɴ [oʊɴ~oʊ], aiɴ/ がある。また，声調には，/á/ [55], /ā/ [33~334], /à/ [11], /â/ [51] がある。絶対語末以外の環境には軽声音節（atonic syllable）も現れる。軽声音節に現れる韻母は /ə/ のみであり，声調符号を付さないことでこれを表す。

本研究のデータ

本稿で扱ったデータはすべて筆者自身が 1994 年から続けている実地調査で収集したものである。本稿のテーマに関しては, 特に Saw Hla Chit 氏の協力を得た。ここに記して感謝の意を表したい。

参考文献

Comrie, Bernard. 1989. *Language Universals and Linguistic Typology: Syntax and Morphology*. Chicago: The University of Chicago Press.

Dryer, Matthew S. 2008. “Word Order in Tibeto-Burman Languages”. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 31.1. pp. 1–84.

加藤昌彦．2001．「ポー・カレン語（東部方言）の関係節」『東京大学言語学論集』20. pp. 275–300.

Kato, Atsuhiko. 2003. “Pwo Karen”. In Graham Thurgood & Randy LaPolla (eds.) *The Sino-Tibetan Languages*. pp. 632–648. London and New York: Routledge.

加藤昌彦．2004．「ポー・カレン語文法」東京大学博士論文.

加藤昌彦．2008．「ポー・カレン語に形容詞という範疇は必要か？」『アジア・アフリカの言語と言語学』3. pp. 77–95.

Kato, Atsuhiko. 2009. “A basic vocabulary of Htoklibang Pwo Karen with Hpa-an, Kyonbyaw, and Proto-Pwo Karen forms”. *Asian and African Languages and Linguistics* 4. pp. 169–218.

加藤昌彦．2010．「ポー・カレン語の「格」」澤田英夫（編）『チベット＝ビルマ系言語の文法現象 1：格とその周辺』. pp. 311–330.

加藤昌彦．2013．「ポー・カレン語の文の分類」澤田英夫（編）『チベット＝ビルマ系言語の文法現象 2：述語と発話行為のタイプからみた文の下位分類』. pp. 81–114.

Matisoff, James A. 1991. “Sino-Tibetan linguistics: present state and future prospects”. *Annual Review of Anthropology* 20. pp. 469–504.

Matisoff, James A. 2000. “On the uselessness of glottochronology for the subgrouping of Tibeto-Burman”. In Colin Renfrew, April McMahon, & Larry Trask (eds.) *Time Depth in Historical Linguistics*. pp. 333–371. Cambridge: The McDonald Institute for Archaeological Research.

寺村秀夫．1993．『寺村秀夫論文集 I—日本文法編—』東京：くろしお出版.